

博士論文要約

論文題目： 自己志向的完全主義の規定要因および精神的健康との関連についての研究

氏名： 中川 明仁

自分の立てた目標や与えられた課題を完全に達成しようとの信念を有することは、一見すると自らを向上させる上でも重要であるが、“完璧にできなければ失敗である”，と考えるようになると課題の達成が困難となることもある。このようにあらゆる場面に亘って、過度に完全性を求めることを完全主義と呼び (Burns,1980), 自己に対して完全性を求める場合を特に自己志向的完全主義と呼ぶ (Frost,Marten,Lahart,& Rosenblate,1990 ; 桜井・大谷, 1997)。

自己志向的完全主義は精神的健康や適応との関連からその多次元性が考慮されており, 桜井・大谷 (1997) により 4 つの下位構造から成る多次元自己志向的完全主義尺度が開発された。自己志向的完全主義の 4 つの下位構造とは「高目標設定傾向」, 「失敗懸念傾向」, 「行動疑念傾向」, 「完全性欲求」である。「高目標設定傾向」とは, 自己に高度な目標を設定する傾向であり, 「失敗懸念傾向」は些細な失敗を犯すことをも過度に気にする傾向で, 「行動疑念傾向」は自分の行動に自信が持てずに不安を抱く傾向である。そして「完全性欲求」は自分の行動全ては完璧に成し遂げられるべきであるとの信念を有する傾向である。

本論文では, 多次元構造を成す自己志向的完全主義が, どのような要因によって規定されるのかということを検証することを第一の目的とした。パーソナリティの規定要因については, 古くから遺伝と環境という大きな二大要因が存在することが議論されてきた。自己志向的完全主義というパーソナリティについてもそれは例外ではなく, その形成について古くは Adler(1956)や Horney(1950)が, 完全性を自己に求めるのは, その個人が自分自身の劣等感を解消するためであり, 完全性の志向は内発的に動機付けられ, 行動化されると報告している。また, 後述するようにパーソナリティの形成過程では, 親をはじめとする家族環境要因も大きく作用するが, 親をはじめとする周囲の影響を受けやすいか否かはその個人の有する気質に違いがあるからであり, 影響の受けやすさの個人差は, 個人の基盤に存在する気質の違いを反映しているとされている (Kochanska, 1997; Kochanska & Askan, 1995)。つまり, 自己志向的完全主義の規定要因のひとつとして, 個人が先天的に有する気質特性が関連することが予測される。さらに, パーソナリティを規定するもうひとつの要因としては, 個人を取り巻く環境的な要因があげられる。その中でも特に家族要因がパーソナリティの形成にとって重要視されており, 自己志向的完全主義の環境要因による起源を記述するための数多くの理論的枠組みが提唱されてきた。

また本論文の第二の目的は, さまざまな要因により規定される自己志向的完全主義が, 個人の精神的健康や適応および行動表出とどのように関連をするのかを検証することであった。具体的には, 完全主義者の特徴の一つとして不安の高さがあげられる。完全主義者が不安を払拭する手段としてどのような自己防衛手段を図るのか, 無意識的なレベルでの防衛機制に注目し, その因果モデルについて検討した。また, 無意識レベルのみならず, 意識的に抑うつ気分などのネガティブ感情をどのようにコントロールしているのかを, コーピングを媒介変数とした検討を行った。さらに, 完全主義的な特性が行動として表出する際, どのような特徴を示すのかを, 交流分析理論による自我状態との関連を通して検討した。以上の目的に沿った本論文の構成を以下に示した。

第 1 章では, 自己志向的完全主義の規定要因および精神的健康との関連についての先行研究を概観

し、それらの研究の問題点を提起し、検討すべき課題を整理した。

第2章では、自己志向的完全主義の規定因として、個人内要因に注目した。具体的には、遺伝規定性が強いとされる気質要因について Cloninger (1987) による気質4次元を援用し、自己志向的完全主義の各側面との関連を検討した(研究1)。自己志向的完全主義の中でも「高目標設定傾向」は、行動の触発システムとして機能する「新奇性追求」がその基盤に存在し、「失敗懸念傾向」や「行動疑念傾向」は、行動の抑制システムとしての「損害回避」がその基盤に存在することも示された。また、自己志向的完全主義の全ての側面の気質的基盤には、物事を粘り強く継続する気質特性である「固執」が共通して存在することが示された。

第3章では、自己志向的完全主義の規定要因としての家族的要因に注目した。具体的には、自己志向的完全主義の発達モデルとして提唱されている「社会的期待モデル」について、認知された母親の期待(研究2)および実際の母親の期待(研究3)の2つの変数を用いて検討を行った。研究2および研究3での検討を通して共通している点として、認知された母親の期待も実際の母親の期待も、学業や就職に対する期待感は、特に男性では自己志向的完全主義の「高目標設定傾向」を抑制することが示された点である。一方で、相違する点としては、認知された母親の「見栄期待」は「高目標設定傾向」や「完全性欲求」を高めていたのに対し、実際の母親の「見栄期待」は、両変数とは関連が認められないという点であった。

第4章では、自己志向的完全主義のもうひとつの発達モデルである「不安的養育モデル」について、第3章での検討と同様に、認知された母親の養育態度(研究4)および実際の母親の養育態度(研究5)の2つの変数を用いて検討を行った。「不安的養育モデル」で問題となる「過保護」は、子によって認知された母親の養育態度でも、実際の母親の養育態度でも、自己志向的完全主義とはほとんど関連せず、規定因となる可能性は低いと考えられた。一方で、「統制」が子の完全主義を低減するとの結は新たな知見といえるであろう。これまで母親の「統制」と子どもの完全主義との関連については、両者に正の関連があるとの報告(Soenens & Elliot, 2005)と負の関連があるとの報告(Rickner & Tan, 1994)が混在していたが、本章での検討の結果、後者を支持する結果が得られたといえる。

第5章では、自己志向的完全主義の規定要因としての家族関係について、質問紙では捉えきれないより自由度が高く表現された家族関係を把握することを目指し、投影法検査である Family Image Test を用いて検証した(研究6)。また、第3章と第4章での課題として残された、母親-娘間での規定機序の検討に加え、父親-息子間での規定機序について検討を加えることを目的とした。前章での質問紙を用いた検討での結果と共通する結果が見出されたことに注目したい。具体的には、子が認知する母親に関わる変数については、主に娘との間でその関連が認められるということである。換言すると、男性(息子)の自己志向的完全主義の規定要因に関しては、母親からの影響はほとんど見られないということである。詳説すると第4章での結果と同様に、娘の完全主義は家庭内での母親の影響力が強く、母-娘間の関係性が密接であると認知するほど、低減するという結果が示された。また、前章父親から子への自己志向的完全主義の影響因として、その影響は男性(息子)、女性(娘)に対して共に、ほとんど認められなかった。

第6章では、自己志向的完全主義が精神的健康や適応へ影響する媒介要因についての検討および行動表出の有り方について検討した。研究7では自己志向的完全主義、コーピングおよび適応との関連を検討した。その結果、「高目標設定傾向」が「情動焦点型コーピング」を介して、自尊感情を高め、絶望感を低減し、「失敗懸念傾向」は「情動焦点型コーピング」に負の影響を、「回避・逃避型コーピング」に正の影響を及ぼしていたが、コーピングから適応指標への影響は認められなかった。また、研究8では自己志向的完全主義、防衛機制および不安の関連についての因果モデルを検証した。その結果、「高目標設定傾向」は「成熟した防衛」を介して不安を低減し、「失敗懸念傾向」が「神経症的な防衛」および「未成熟な防衛」と正の関連を示し、「未成熟な防衛」のみを介し、不安を増大させて

いた。そして研究 9 では、交流分析理論を援用し、自己志向的完全主義の行動表出の有り方を検証した。その結果、特に女性において自らに高度な目標を設定する完全主義者は、周囲を省みない自己本位な行動取られやすい傾向を示し、男女ともに失敗を過度に懸念する完全主義者は、周囲の視線を気にした自己抑制的な行動を示す傾向にあった。

そして最終章である第 7 章では本論文での成果と限界および今後の展望について述べた。自己志向的完全主義の各側面にはその規定要因として特有な個人内要因および家族的要因が存在することに加え、あらゆる側面に共通した規定要因が存在することを示したことは、本論文での新たな知見といえる。しかしながら、本研究では大学生という限定された集団を対象としている点、また横断的手法による検討が主となっている点など、本論文での結果を一般化していくためにはさらなる精査が必要である。また、今後の展望として、自己志向的完全主義は精神的健康や適応にとっては不適応的なパーソナリティであると強調されがちであるが、そのパーソナリティが有効に機能する場面も存在することが考えられる。つまり、失敗が決して許されない場面においては、有用な側面となり得るわけである。このようなケースを考えた時には、自己志向的完全主義を短絡的に適応・不適応の二軸で捉えるのではなく、場面や状況によってその都度捉え直す必要があると考えられる。